

## 不登校に思う（その2）

平成27年12月末に「不登校に思うーその1ー」を皆さまにお届けしましたら、A君のお母さんから、次のような言葉をいただきました。

「先生の書いておられる通り子どもが不登校になった時、まさかうちの子がと思い、どうしても受け入れることができませんでした。私達、親は子どもの将来を思って、よかれかしと思い、子どもを育ててきました。時にはきついことも言いました。しかし、子どもは不登校になりました。子どもが不登校になった時、私達はなんとかしなければと大変あわてました。私達は『不登校』ということ認めることができませんでした。

今思うと、その根底には『不登校は悪い』という価値観がまずあったのです。そして、子どもが思っていることや、苦しんでいることを知ろうとしていませんでした。一方的に親の言い分を押し付けていたのですね…」と。

私も2人の子どもの親として、子育て中は悩みも多く、これでいいのかという思いを繰り返す毎日でした。このように悩んでいる時にアメリカの小児医学心理学者のブラゼルトン博士の言葉に出会い考え方が変わりました。その言葉は次のようなことです。

「一人ひとりの子どもは生まれながらにして、はっきりした個性を持っており、また親や、保育者もそれぞれ独特な個性を持ち、この両方の間に展開される独特なドラマが育児であり、保育である。そして、せっかちな親はのんびりした子どもが気になり、神経質な親はおおらかな子どもが気になるように、その「相性」<sup>あいしょう</sup>によって問題が大きくなったり、小さくなったりするのです……」というのです。この考え方に出会ってから、私は少し荷が軽くなり、何とかなるだろうという思いから、心にゆとりをもって子育てにあたるようになりました。

不登校の子ども達と接していると、親子関係、友人関係で悩んでいるのだなあということが、よくわかります。それにじっくり耳を傾ける事です。今回も子ども達の声を少し書いてみたいと思います。

- ・ 父親が僕に向かって「どこの高校に行きたいのか。本気で高校に行く気はあるのか。偏差値は大丈夫か」  
日頃は全く目を向けないのに何で急に、このようなことを言うのか。
- ・ 親が自分ではどうすることもできないおれを他人(病院)に連れて行った。おれは親に認めて欲しかっただけなのに。
- ・ 家族でゆっくり、笑いながら食事をする時がなかった。小学校の6年生の時は、週4日も塾に行かされた。日曜日は時々塾の試験があった。夕ごはんはコンビニの弁当を塾で食べていた。さみしかった。家族で食べたかった。
- ・ 逃げないで、本気になっておれと話してくれた父親に救われた。
- ・ がみがみと言っていた親が、どこで勉強したのか、急にがみがみ言わなくなった。  
その分こちらから親に近づいていった。

このように子ども達はいろいろな思いを持って、親子、友人関係の中で育っていくものです。私達はこのように悩んでいる子ども達を『ホッと』させてやりたいのです。そのためには、言葉が少し厳しくてすみませんが、「親が変わること」です。親が子どもの状況(現状)を正面から全面的に受け入れ、子どもに寄り添うことです。そして理解することです。そのための一助になればと翔学館では川原先生方が全力で子ども達にかかわっています。私も少しでも手助けになればと相談に応じています。

牛島 達郎

